



### 新年のご挨拶

社友会会長 大西光男

社友会会員の皆様、あけましておめでとうございます。令和5年（2023年）が明けました。皆様におかれましてはつつがなく新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

令和2年の初めから新型コロナウイルスが発生し、丸3年、出口の見えない感染拡大状態に、昨年も混乱の中に過ごした方も多いと思います。

日常生活が制限されていた緊急事態宣言がひとまず終わり、インバウンドが解禁されるなど、経済活動にはわずかながら明るい兆しもありますが、ご承知の通り、人と人との接触機会が増える影響で感染拡大につながる懸念されます。

年末年始で忘年会や新年会、帰省等移動が増えた影響で、オミクロン株による第8波は既に第7波のピークを上回っており、移動制限のない現状では、個人がひとり一人で感染防止に努めるしかありません。ワクチンの追加接種で感染拡大に備えましょう。また、ニューノーマルの行動様式にも心がけ、徹底しましょう。冬場は外出自粛で家で過ごすようになって換気がおろそかにもなり、感染が拡大する要素になるそうです。適切な換気に心掛けましょう。

このような環境にあることを前提に、2023年の社友会活動はまた、Withコロナのもとで昨年同様、リモート会議やホームページによる情報伝達など一定の制限のもとに活動せざるを得ないことをご理解賜りたいと思います。



ダイヤモンド富士

コロナ禍の完全な終息は不透明な中ではありますが、人々の感染予防意識の高まりに加え、コロナ予防策としてのワクチン接種、経口治療薬の承認等により予防環境は充実していくと考えます。

2022年度の総会・懇親会は2023年5月27日（土）に予定しております。

コロナに負けず、昨年度の経験を生かして、無事、開催できることを祈っております。

安心して生活できる日が1日でも早く戻ってくることを願いつつ、より良い社友会運営を行っていきたいと思っておりますので、皆様のご協力、ご支援をよろしくお願いいたします。

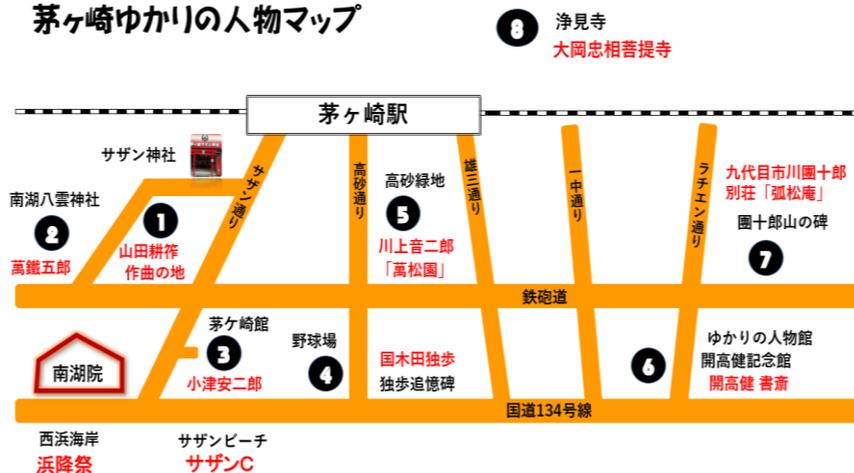
皆様の益々のご健勝を祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

### 会員の投稿記事

### わが町ゆかりの人物を訪ねて

淡嶋 英昭さん

#### 茅ヶ崎ゆかりの人物マップ



退職後に散歩を始め、その行動範囲を徐々に広げてきましたが、コロナ感染拡大に伴い基礎疾患を持つ身としては電車やバスなどの移動手段を控えるを得ない状況になっています。

この機会に何気なく歩いてきた道で、町に“ゆかりある人物”が過ごした場所に絞り調べた結果を、ここに纏めました。ズボンのポケットにスマホを入れ歩いてきましたので、その内容を紹介します。

## ① 山田耕筰「赤とんぼ」作曲の地(旧居跡)

茅ヶ崎駅南口からサザン神社を通過し5分ほど歩くと駐車場に案内板があり、矢印に従い進むと山田耕筰「赤とんぼ作曲の地」という手書きの解説板がありました。オーケストラ楽団の失敗と多額の借金を抱え憔悴した耕筰は、1926年(40歳)家族とトラック3台分の楽器と共に静かな海辺のこの家に居を移し6年間過ごしました。耕筰は、ここで作曲意欲が高揚し、東京へ往復利用する列車の中でも詞の余白に5線を引キメロディーを書き込むなどして、数週間で「赤とんぼ」「この道」「砂山」など童謡100曲を作曲しています。



山田耕筰 住居跡



「赤とんぼ」作曲の地 解説板

### 竹かんむり

耕作から耕筰に改名  
ハゲ・かつらを付けろと  
言われた耕筰の答えは  
竹かんむりを付けること  
(ケケ→毛毛)である

## ② 南湖院で療養した日本の洋画界の先駆者「萬 鐵五郎」

南湖八雲神社境内の片隅に解説板がありました。鐵五郎は1918年(33歳)に過労と睡眠不足から神経衰弱気味となり、更に肺結核に罹り1919年(34歳)弟が住む南湖八雲神社近くに転居。南湖院(結核療養所)で療養を始めました。療養中は、市内南湖の海辺や隣町の柳島の風景等を多く描き作品を残しましたが、1927年(41歳)茅ヶ崎の自宅で死亡しています。



八雲神社境内解説板



萬 鐵五郎

茅ヶ崎海岸にて

## ③ あの名作が生まれる「物書き宿」 小津安二郎が愛した「茅ヶ崎館」

サザン通りを南に進み左折すると「茅ヶ崎館」が見えてきました。映画の巨匠、小津安二郎監督は、1937年に初めて「茅ヶ崎館」を訪れ以後、投宿しながら脚本執筆し、20年間で「晩春」「麦秋」「東京物語」等の代表作品をここで生み出しました。最近では是枝裕和監督が2007年から毎年のように宿泊して脚本を書いています。

樹木希林さんは、女優生活57年最後の出演映画『命みじかし、恋せよ乙女』の撮影に訪れています。また、ここには日本最古と言われる木製サーフボードが保存されています。



茅ヶ崎館



小津安二郎

## ④ 最後の141日を茅ヶ崎で過ごした国木田独歩 (独歩追憶碑)

茅ヶ崎公園野球場スコアボード裏の駐車場脇に「独歩追憶碑」がありました。小説「武蔵野」で知られる小説家、詩人、国木田独歩は1907年に肺結核に罹り1908年2月4日から茅ヶ崎の「南湖院」(結核療養所)で療養生活を始めました。この時の「病床録」が「読売新聞」に連載され、南湖院の名が一躍高まっています。独歩のわがままと癪癢持ちは誰もが認めるところで、院長は声を出さないよう注意していましたが、来訪者との談話は数分離れた病室でもはっきり聞き取れたといいます。6月23日大量の咯血と同時に何の苦悶もなく38歳で最後を迎えています。



独歩追憶碑

## ⑤ 市川團十郎を慕い隣人になりたかった川上音二郎と貞奴 (高砂緑地「萬松園」跡)

oppapepaというところのご存じの方もいると思いますが、明治期の興行師、芸術家、新派劇の創始者である川上音二郎は1902年(38歳)茅ヶ崎に住む市川團十郎の隣人になりたくて、愛妻貞奴と共に高砂緑地に本宅を構え「萬松園」と名付けました。線路脇に櫓を建て、村民に「ヴェニス商人」を公演したり、團十郎の葬儀には弔問客ため住民と協力して道路を整備するなど尽力しています。駅近くに演劇学校を創立する予定もありましたが1911年急性腹膜炎で昏睡状態となり貞奴の願いにより建築した「大阪帝国座」舞台上に運ばれ47歳で死亡しました。



毎年高砂緑地で開催される  
“音貞オツケ祭り”



川上音二郎貞奴  
モニュメント



### 「川上音二郎貞奴 隠し部屋跡」

オツケペー節で人気を博したが、その政治的表現の為20回以上逮捕されています。二人は茅ヶ崎駅近くの魚屋の中二階に身を潜めた時期もあります。

## ⑥ 1人で執筆に集中したく単身で引っ越した開高健 (邸宅は開高健記念館として開放)

ラチエン通りを海に向かって歩くと右側に「開高健記念館」がありました。作家、コピーライターとして活躍後「裸の王様」で芥川賞を受賞した開高健は1974年(44歳)から1989年(58歳)で亡くなる迄15年間うっそうとした木が生い茂った環境の良いここを起点として活動を展開しています。現在開放している書斎の中にはベトナム戦争従軍体験時の鉄製ヘルメットや釣りに旅行などの資料が当時そのままの形で展示されています。



開高健記念館



開高健記念館の石碑



モンゴル巨大イトウ

### サントリーキャッチコピー

“「人間」らしくやりたいナ  
トリスを飲んで「人間」らしく  
やりたいナ  
「人間なんだからナ」

### 石碑銘文 「入ってきて人生と叫び 出て行って死と叫ぶ」

開高健が色紙に好んで書いた言葉が石碑に残されている

## ⑦ 釣りが趣味で茅ヶ崎に居を移した九代目市川團十郎 (團十郎山の碑:別荘「孤松庵」跡)

鉄砲道を東に向かって歩くと交番の横に「團十郎山の碑」がありました。奥には地元で「團十郎山公園」として親しまれている場所があり、ここが別荘跡地の一部になります。

明治時代に活躍し「劇聖」と言われた歌舞伎役者、九代目市川團十郎は、1896年(58歳)住んでいた別荘が火事により焼失したことを機に海に近く釣りが楽しめる6千坪の地に別荘を建てました。別荘は「孤松庵」と名付け、敷地内には稽古場を備え次世代の歌舞伎界を担う若手を育成しています。1903年65歳で死去した際は、川上音二郎が葬儀を仕切り、大磯に住む伊藤博文の弔辞も川上が代読しています。



團十郎山の碑



團十郎元禄見得

## ⑧ 大岡家菩提寺(浄見寺)と大岡越前まつり

茅ヶ崎駅から北に1時間ほど歩きゴルフ場(300ゴルフクラブ)を抜けると、大岡家の菩提寺である「浄見寺」がありました。

江戸時代の名奉行、大岡越前守忠相を輩出した大岡家は茅ヶ崎に領地を持ち統治していました。墓所は普段柵に囲まれ中には入れませんが、年1回開催される大岡越前祭り時に開放されます。



大岡家菩提寺浄見寺



大岡忠相の墓



大岡越前祭りパレード風景

最後に、茅ヶ崎南湖院は、当時東洋一と称された結核療養所で、多くの文化人も療養し見舞いの家族も訪れています。姉が療養し度々訪れた女性解放運動家「平塚らいてう」は、ここで5歳年下の画家奥村博史と運命の出会いをします。博史から、らいてうに送られた手紙の中の「あなたが雷鳥なら私は若い燕」という言葉から年下の男性の恋人を、「若い燕」と呼ぶ流行語が生まれています。

高砂緑地には、らいてうの別荘跡があり石碑が建っています。毎年開かれてきた「大岡越前祭」(4月)と「浜降祭」(7月「海の日」)は、2020年から3年間開催中止。祭りは、見るだけの私ですが、早起きして海岸までの散歩を楽しみにしています。

## 「相模原駅」の思い出 山田 泰司さん

先日、読売新聞の夕刊(令和4年7月14日)に「わがまち相模原編」という記事を読み、一寸懐かしく往時を思い出してみました。

第二次世界大戦も押し詰まった昭和19年6月に、東京区内の小学3年生以上の学童を首都から強制疎開させる「学童疎開令」により、当時東京品川区大井町駅近くの小学校6年生の私は、都下南多摩郡堺村字小山(現在の町田市小山町)のお寺(福生寺 ぶくしょうじ)に行くことになりました。

6年生は最高学年として現地を事前に知っておくため7月に東神奈川から横浜線で相模原に向かいました。当時の横浜線は東神奈川一八王子間に菊名、小机、中山、長津田、原町田、淵野辺、相模原、橋本、相原の9駅しかないローカル線でした。ただし開通は1908年(明治41年)と以外に古く昭和7年原町田まで電化、昭和16年3月に八王子まで全線電化された。私の乗った当時、小机と中山間にあったトンネルを抜けると急に田んぼが広がり、田園風景そのものでした。

原町田を過ぎ橋本までほぼ14kmを一直線に広大なさがみ野が続き「相模原駅」はその末端にありました。駅舎は新しく白っぽい近代的造りでびっくりしました。というのは、この駅は昭和11年頃から線路北側の陸軍造兵廠設置に伴う通勤者増のため昭和16年に開業したばかりの新駅であったのです。戦後この広大な地域はそのまま米軍に接收され、8年前やっとその一部が返却されたが、現在も大部分は「米軍補給廠」として残っている。



電化されたころの横浜線



当時の相模原駅舎



当時の相模原駅ホーム



現在の福生寺

私たちは駅の北側の造兵廠敷地を脇目に枝道に入り、細い水路のような境川を越え、ほこりっぽい街道（町田街道）をしばらく歩き小山小学校前に着いた。お寺はその脇の階段を上った所にあった

学童疎開先は収容施設の大きさ等により異なり、私たちはその年の8月に今まで通り男女別の4クラスごとに別々の寺に入った。

授業と日常生活の基本はクラス担任（私のクラスは偶々僧籍の先生でした）と寮母さんが中心であり、地元の小学校とは特別の時以外は別行動であった。日々の生活は親元から送られた寝具と最小限の携帯品でやりくりしたと思います。戦時下とはいえお寺は疎開学童を預かり大変であったとあらためてありがたい事と感謝しています。



前述のように鉄道の北側は田舎とはいえ軍とのつながりが深く、現在の尾根緑道は「戦車道路」と呼ばれ、そこで戦車、装甲車のテストを終えたあと駅南側の現国道16号（砂利道）から横須賀軍港へ移送されたそうです。私たちは面白がって小高い丘を越え「戦車道路」まで行ったが戦車は見たことがない。多分送り出す戦車がもうなかったのではないかと。この地区は鶴見川沿いと違い水利に恵まれず殆ど畑作主体で、狭い畑にわずかに取り残された小指ほどのサツマイモを焼いて空腹の足しにしていた。



陸軍造兵廠跡の米軍基地



旧陸軍造兵廠正門（平成25年）

私たち6年生は翌昭和20年（1945年）の卒業、中学受験のため2月末から3月初め頃帰京することになった。わずか半年余の学童疎開経験であったがいくつか印象に残る出来事もあった。最も驚いたのは寺の裏手の墓地を仲間と一緒にぶらついていたら米軍のグラマン戦闘機が急降下、機銃掃射を始め、慌てて逃げたこと。おそらく戦車道路を目標としたのであろう。

他に橋本駅近くにいる別クラスの寺を訪問した際、駅に停車していた相模線SLからの煙と蒸気の入り混じった匂いと音を何となく思い出す。この橋本駅はリニア新幹線駅として現在大変身中のようだ。そういう意味では、現在の相模原駅中央通りや国道16号沿いの美しい並木道など想像もつかないほどの変わりようである。

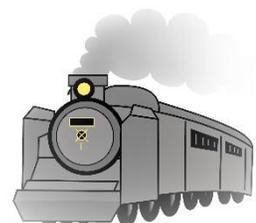
今からほぼ78年前の話で、当時からさらに78年前の1866年（慶応2年）と云えば大政奉還の1年前の未だ江戸時代の最後に当たり、世の中が想像もつかないほど変化するのは当然です。

ただ、今年2月24日に始まったロシアのウクライナ侵略の実態を見ると、相変わらず昔と同じように戦車主体の地上攻撃の惨劇が繰り広げられ、何ともやりきれない気持ちです。



現在の相模原駅前

- 【参考文献】 「横浜線百年」 サトウ マコト 著  
「東京近郊一日の行楽」 田山花袋 著  
「東京都の百年」  
読売新聞の記事  
昭和一九年の鉄道路線図復刻版



# 趣味と同好の集い

## 「百蔵山」山頂から 富士山の眺望を求めて

11月5日（土）にウォーキング有志の会の「中央線八駅八山八富士（中央線の8つの駅から8つの山に登り8つの富士山の眺望を見よう!）」第四弾に参加しました。

今回は、百蔵山（ももくらさん、山梨県大月市にある標高1003mの山）の山頂から富士山を眺める計画です。猿橋駅でメンバーと待ち合わせ総勢7名で出発しました。

（今回は計画外ですが、桂川の渓谷にかかる「猿橋」（日本三奇橋の一つ）もお勧め）



JR中央線「猿橋駅」



桂川渓谷の紅葉



いざ、百蔵山へ



中腹の休憩所で一休み



さあ～、頂上目指して



主幹事中村さんの説明



百蔵山（1003m）山頂に到着  
（残念ながら富士山は顔出さず）



楽しみの昼食&懇親会  
（あれ？ 一升瓶？）



さあ～「猿橋駅」まで頑張ろう

お天気は予報に反してどんよりした曇り空で朝は寒く、登りだしたら直ぐ暖かくなり、頂上に着いたら風が冷たくて寒い、気温の変化が激しい一日でした。皆さん服装で上手く体温調整していました。残念ながら第四弾も富士山は姿を見せてくれませんでしたので、楽しみは次回（第五弾）に持ち越しとなりました。

参加者の中には久しぶりにお会いする人もいましたが、皆さんお元気で紅葉を楽しみながら、そしてお会いする地元の方や登山者と挨拶を交わしながら無事に山頂まで登り猿橋駅に戻りました。（途中で柚子を収穫中の地元の方からおすそ分けも頂きました。）

やはり同じ会社で苦楽を共にした仲間はいいですね。元気なお姿にお会いできるだけでも嬉しいですが、この会の名物でもある昼食&懇親会、そして反省会での皆さんの近況報告や現役時代の昔ばなしが一番の楽しみです。（何時も話が弾んで、毎回、飲み過ぎに注意です。）元気なうちは参加したいですね。

ちなみに今回の参加は、武田さん、西川さん、古森さん、熊坂さん、中村さん、大田さん、牧之田の7名でした。

【ウォーキング有志の会は2008年頃から「健康ウォーキング」として年6回の計画・実施を目指して活動（ここ3年はコロナ禍で計画倒れ）しております。エントリーメンバーは東亜石油グループの現役・OB/OGを合わせて約40名で、実施案内の都度に各人が自身の都合や体調・体力等で判断して参加する会です。】

(T.M)



反省会はいつもの八王子駅近くの「金太郎」

## 伝言板

### 会員の移動

#### 新会員

甲斐 均さん	令和4年	8月	(新潟県在住)
栢 昭彦さん	令和5年	1月	(東京都在住)
込山 進さん	令和5年	1月	(神奈川県在住)

### お悔やみ申し上げます

中島 勝重さん	令和4年7月26日	(71歳)
小野 富康さん	令和4年8月24日	(84歳)
(令和4年12月末日現在 会員数 196名)		

### 2023年長寿の祝い

本年の該当者は次の皆さんです。会員一同からお祝い申し上げます。

#### 米寿(1935年誕生)

加藤 順太郎(1月14日)、1月記念品贈呈  
千石 幸男(8月15日)、武者 義雄(9月23日) 7月記念品贈呈

#### 喜寿(1946年誕生)

山田 忠雄(1月4日)、稲葉 董(1月15日)、玉江 牧雄(1月26日)  
安藤 裕吉(4月13日)、新井 護(6月14日) 以上 1月記念品贈呈  
斎藤 肇(9月3日)、菅原 健吾(9月5日)、今井 健一(9月24日)、安永 明(12月8日)  
柳井田兼一(12月15日)、鈴木 和夫(12月22日) 以上 7月記念品贈呈 (敬称略)

# 春のハイキングのご案内

## 「コロナに負けず 早春の三浦半島をハイキング」

ソメイヨシノに比べ、開花が早く花が大きめで色も濃いピンクになるのが特徴な河津桜のお花見、および城ヶ島をハイキングしませんか！

1. 開催日 **令和5年3月2日(木)** 雨天中止
2. 集合場所と時間  
京浜急行線 三浦海岸駅改札 10時集合
3. コース  
三浦海岸駅 → 京急三崎口駅 散策(河津桜見物)  
→ 京急三崎口駅前 → 城ヶ島(路線バス:25分)  
→ 城ヶ島島内散策(昼食予定)  
→ 城ヶ島大橋を渡る(徒歩)  
→ 三崎港見学(みやげ屋:うらり)  
→ 三崎口駅(路線バス:25分) → 解散(15時目標)
4. 費用  
交通費、および食事・飲食代は各自負担。
5. 募集の締め切り : **2月24日(金) 厳守**

### 6. 応募先

各部門の世話人へ電話かFaxでご連絡ください。

管理・製造 : 鈴木 和夫  
工 務 : 大西 光男  
環安・保安 : 石井 好  
本社・総務 : 中村 睦夫



京急電車と河津桜



城ヶ島ハイキングコース  
城ヶ島バス停(終点)から赤コースを歩き  
青コースを経由して城ヶ島大橋を渡る

令和五年も三が日恒例のニューイヤーズ駅伝、箱根駅伝で年明けを迎え、穏やかなうちにスタートしました。令和四年を振り返ってみるとまさに激動の年と言つていいでしょう。二月に日本史上最多の十八個のメダルを獲得した北京冬季オリンピックが終わるのを待ち構えていたようにロシアが突然ウクライナに軍事侵略を始めた。プーチン大統領としてはクリミア半島を収奪したときのように十日間程度で完了すると考えていたようだが、ウクライナの反撃が厳しくもうすぐ一年を迎えようとしている。その間のロシア人の戦争犯罪行為は激しく、それにも屈することなくウクライナ人の自国を守る意識は高く、われわれ日本人の自国防衛意識に大きな影響を与えているのではないだろうか。

この出来事は世界経済にも大きなインパクトを与え、特にエネルギー価格の高騰が物価の高騰を招き、特にわが国では円安も進み、経済の停滞が続いている。国内では、コロナの感染が続き、従来の予防策とワクチン接種で対応してきたが、ウイルスコロナに政策転換し、十月には、水際対策大幅緩和に踏み切り経済重視に進みだしている。われわれの意識もその雰囲気によって変わってきているのではないだろうか。そういった中、七月の参議院選挙中に安倍元首相が狙撃され亡くなった。その動機が解明されていくにつれ、旧統一教会問題がクローズアップされ、多くの国会議員(特に自民党議員)が協会とかかわっていたことが明らかに。大臣の退任と国会審議の停滞が進み政治不信の広がりとともに日本の停滞が進んでいる。

しかし、明るいニュースもあった。特にスポーツ面では多くの若者が活躍してくれた。四月には佐々木朗希が榎原以来の完全試合を達成し、アメリカ力では大谷翔平が二刀流で大活躍し、我々の心を躍らせてくれた。そして、最高のイベントはサッカーワールドカップで優勝経験のあるドイツとスペインを破ってベスト十六に進んだことではなかったか。久しぶりに興奮と勇気を与えてくれた。

スポーツは素晴らしい。今年には春にワールドベースボールクラシック、秋にはラグビーのワールドカップが行われる。それらを通じて日本が一步前進することを期待したい。

ウサギのようにジャンプしよう。(HS)

編集後記

